

ブータン訪問記

「養老の森」理事 大田昌博

2016年9月20日より同月27日まで1週間に亘り「養老の森」顧問の養老孟司先生に同行してブータンを訪問しました。

今回の訪問は総勢6人、先生の魅せられたブータンを先生と共に興味深く旅してきました。

「養老の森」実行委員からの参加は私だけとなったが、「養老の森」ファンはじめ各実行委員にブータンでの諸事を伝えるべく当レポートを遅ればせながらアップします。

養老先生はブータンに6～7回行かれているそうです。

今回の訪問後「昆虫まめ博士認定観察会」に参加した皆さんにこんな話をされていました。

「ブータン人は日本人とよく似ている、江戸時代の日本人の顔だ」

「ブータンはこの時期（秋）にクリの木に花と実が同時についていて、サクラは満開で若葉がある。日本の自然と常識が違うので、よく自然を観察し感じていないと四季の違いが分からない」

「（ブータンは輪廻転生の世界で生まれ変わりを信じているから）生き物を殺さないでスイスから大量に送られた殺虫剤を返した」

「生き物を大事にするので道路に犬が寝ていたりする」

こうした話を例に取りながらブータンに残されている大事なものを感じさせてくれました。

先生がブータンになぜこんなに魅了されているのか、真に大事なものは何なのかについては、2017年の正月の新聞紙上で同行した共同通信配信の記事にしているのでご覧いただきたい。因みに、山梨日日新聞では1月3日の13面に掲載されていました。



9月20日、「養老先生と行くブータンの旅」が始まった。先ず羽田からバンコクへ飛んで一泊する。

9月21日、9時5分、ブータン国営ブルック航空の便で、バンコクからインドのコルカタ経由にてブータン唯一の国際空港パロへ向けて離陸。

昼にパロ着。3時間の時差。標高約2,200mのパロの街は、曇りなのに爽やかだ。少し空気が薄く感じられたのは気のせいかな。

タラップを降り全員で記念写真。



山の合間を縫っての離着陸ゆえに世界で一番難しい飛行場と言われている。パラグライダーをするSさんは非常に感心していた。あとでガイドさんに聞いた話では、飛行経験の長い日本人パイロットも操縦をブータンの操縦士に代わってもらう程だ、と言う事だった。

通関所は日本の小さな駅舎ほどであった。建物の外観、内装の彫刻、係官等の服装はブータンに来たとの感を持たせる。

養老先生ほか喫煙者のたばこ持ち込みの手続きやブータンのお金ヌルタン（円の約1.6倍ほど）への両替に手間取り、空港を出たのは最後の方だった。

今回の旅行社DNHのゲンボチーフさんとガイドのウルバさんたちの出迎えを受けマイクロバスに乗り込む。

ブータンでのツアーは、人数に関わらず運転手付きのマイクロバスとガイドがセットになっており、一人の場合でもマイクロバス移動のことがあるようだ。



勝手にバックパッカーで歩くことは認められず、ガイドがついて、更に事前決定している行程に基づいて移動する。併せて国に25%ほどの税金を納めるようになっている。

市内観光は、高台にあるラカン（寺）から始まった。空港から川を挟み対岸に向う、道路は1車線でガードレールはない。

視界に入る風景はというと、樹木の少ない山ではあるが道志村に似ている。

そして、あちこちの山には慰霊のための白いのぼり旗や願掛けのための色付きのぼり旗（ダルシン）、竿があちこちに立っている。

川は雨期の終わりで水量も多く流れも速い。少し白っぽく濁り気味の川は冷たそうで上高地の流れを思わせた。



最初の訪問地はタ・ゾン国立博物館だ。高台にあり白い円筒形の建物で、周りには装飾があり、昔は望楼として利用され、眼下のパロ・ゾンと呼ばれる施設と連携して敵に備えたものである。

博物館内部は、祭りの面や仏画の掛け軸のほかパロの鳥

類、動物等も展示されている。施設内は薄暗く、展示の方法も稚拙さがみられるが地震で少し被害があり仮営業中であることも影響しているのかもしれない。外で記念写真を取っていると民族衣装のゴ（男物、襦袢の感じ）、キラ（女物）を纏った学校帰りの子供たちが駆けていた。その表情は明るく、屈託のなさは今の子供には見られないものである。写真の撮影に応じてもらい、それぞれ一緒に撮影したが、物欲しげな様子もなくかわかった。



タ・ゾンから坂道を下りパロ・ゾンに向かうが、養老先生は樹木や虫が気になる様子であった。

パロは全体に野良犬が多く、どこに行っても見かける。狂犬病の対策の出来ている犬は耳の先が片方切り取ってある。

ブータンでは生き物を大事にするため、道路を牛が歩いていたりする。犬も誰かが餌を与え、祭りの日には犬にもご馳走が出るとガイドが言っていた。

牛が多いことでチーズやバターを使った飲食物が多い。慣れないとあまり旨くはないがバター茶というのがある。

旅行前にブータン料理はすべて辛く、翌日には尻が痛くなるなどと聞かされていたが、日本人向けなのかそれほど辛い料理はなく、錦糸町の刀削麺の方が辛い。

料理にいつも付くのがエマ・ダツィと呼ばれる唐辛子のチーズ煮込み。ブータン料理は全般的に完成されてはいないが他の料理にエマ・ダツィを混ぜるとまあまあだ。俗に味は三代と言われるが、食文化を高める考えは無い様だ。

バターやチーズと言えば、「牧畜と農耕（米）を一緒にする文明は珍しい」と養老先生が言っていた。

確かに日本を含む「稲作漁労文明」と「畑作牧畜文明」との違いは、自然と共

存する文明と自然から搾取し崩壊させる文明の違いだと安田先生の本に載っていた。

ブータンは殺生を嫌うため魚釣りは禁じられているが、自然保護の意識（国レベル）は高く稲作漁労に近い。

パロ・ゾンに降ると巨大な白い城壁で囲まれた砦の内部に大きな建物があつた。ゾンとは寺院と地方行政の機能を持った建物であり、現在はそのように使われているが元々はチベット軍の攻撃に備える砦であつた。周りはブータン装飾の付いた城壁で囲われ、内部には石畳の広場があり、中にや



はり装飾の施された高い建物がある。

ゾンを出て屋根の付いた橋（全体に多い）を渡り、先回りし待っていたマイクロバスに乗り込みパロの街を見ながらホテルへ向かう。

ホテルは新しくできたリゾート風の建物だが、細部のい

たる所に日本では許されないような手抜きがある。

我々の部屋もバスルームは大理石でできていて豪華だったが、シャワールームの排水は処理の基本が出来ていないため悪臭がして閉口した。

夕食は皆でホテル内で済ませ、明日に備え早めに就寝。

22日、朝食後タクツァン寺院へ向かう。

標高約2200mのパロの町はずれから山に登る。タクツァン寺院は3000

m付近の絶壁にある寺院で、8世紀にグル・リンポチェが飛虎に乗って舞い降りたと言われるブータン最大の仏教聖地だ。チベット世界全体から巡礼者が訪れるという。麓の駐車場から速い人でも3～4時間、ゆっくりだと一日がかりのコースだ。

ガイドをはじめブータンの人たちの暮らしの根底には宗教が深く浸透しているので、その辺が幸福度ランキングNO. 1を理解するためには必要だ。チベット仏教については密教系に近いとの事だが、日本人の先祖崇拝も含めた習俗的宗教観とは違いがある。特に「輪廻転生」があり、現生の刹那を生きるのみでなく永遠の時空を生きること、「生きとし生けるものへの慈愛」のような感覚を生来の物として受け入れている。

登山口の駐車場（舗装もしてない坂の広場）には、多くのマイクロバスや自家用車が集まり混雑が始まっていた。

トイレはあるが全体にどこもそうだったが、男便器の位置が高く苦勞する。ブータン人は小柄だが建築工事のほとんどがインド人任せだったからだ。

巡礼登山の入山口には多くの馬を連れた少数民族的風貌のブータン人が居て、かなり急な道だがある程度上まで馬で登る事ができる。馬で登るのは中国人が多いそうだ。登山道には馬糞があちこちにあり、その匂いには閉口した。

登山道そばにはウスユキソウと思われる山野草などが何種類もあり、時折疲れを忘れさせてくれる。

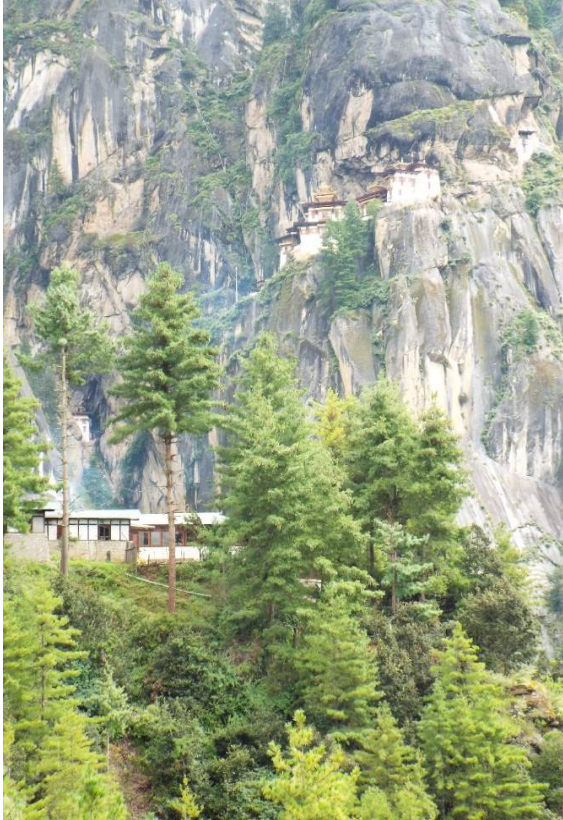
各自のペースで登っているが、養老先生は虫を見つけたりしながらゆっくりとした足取りで、八合目ぐらいにある谷越しに建つタクツァンの見える休憩所まで登りあげた。

休憩所でのコーヒーと甘いクッキーは疲れた体に心地よかった。養老先生は皆が帰ってくるまで待つことになったが、年齢を感じさせない体力には驚かされた。

さて我々も休み休みしながら登り、最高地点はプロトレックのメーターによると標高で3200mを超えていたので、空気も薄く感じられ高山病の心配も出



てくるような状況だった。



実際に0さんは体格もよいせいか空気が薄く頭が重いと言って苦しそうで心配した。

最高地点からさらに、間違えば谷底まで落ちそうな岩場の石段を100m程も下り高い滝を横目に歩き、また石段を上がりやっとの思いで寺院にたどり着いた。

寺院の中ではガイドの解説を聞き、五体投地で拝礼をし、賽銭を入れ聖水（薄い黄色の液体で少し植物臭あり）を頂き口に含み体にかける。

また暫く時間を取り瞑想に耽ったりした。

寺院内をめぐり眺望のよい場所に出る。ベランダ越し覗くと足のすくむような

場所だ。後ろの椅子には二人の若い修行僧がいた。ブータンではどこに行っても赤い僧衣を着た僧侶を多く見かける。

誰ともなくガイドを通じて話しかけ質問タイムになった。22歳前後だというのが若くして僧侶の道を選んだことに後悔はないと言う。通常8歳ぐらいから道を選び、14～5歳で最終的に決めることが多い。

一度この世界に入ると還俗はできないし、還俗すると周りからも人格否定の目で見られる。無論結婚もできないし世俗の楽しみはできない。

今後は山に籠って修行するか、僧院に入り修行するか決めるという。大変な決断ではあるが僧侶は食事の心配はなく、ブータンでは尊敬される。

帰路は滝まで降り、再び最高地点まで石段を登りあげ、後は降るのみである。滝から登る石段がまた一苦勞であったが、ようやく養老先生の待つ休憩所に着いた。

休憩所でブータン料理のバイキングで遅めの昼食を取り再び下山を始める。

駐車場付近には土産物屋が並び2、3点の小物を買求めた。

ブータンは外国人旅行者を制限しており、量より質で稼ぐ方式で一人当たりの客単価を高く設定している。近隣同盟の8か国に対してはある程度自由に行き来できる様だ。

グローバル化が進む現在、タクツァンも世界遺産の話もあるが前向きではなく、



他の候補地も進める意図はないのが現状だという。

広く開放し多く集めるより自分たちでコントロールする考え方は、やたらと世界遺産にしたがる日本とは違う。再びバスに乗りホテルに戻ってから夕飯を食べるため、パロの街に出ることになった。

養老先生は昨日頼んでおいた外灯の傘の中に入っている虫の調査を始めた。死んでいる虫なので心理的に抵抗

は少ないが目ぼしいものはなさそうだった。

調査と雖も虫を殺すことは嫌われる。以前養老先生が来た時、テーブルに水玉文様かと思われるほどの蠅が居て追い払うと「お前のおじいさんかもしれないぞ」と言われたという。

パロの街を見物しレストランでブータン料理を食べた。

食事中に子供たちが10名ほど集まってきて歌を歌いだした。子供達でスポーツの大会(?)に出かけるのでお小遣い稼ぎだという。皆で少しお小遣いを上げると喜んでいた。



旅行中は何処に行っても輸入物のビールやワイン等はなく、ブータン産のビール（ラガーやレッドパンダなど）やワインだが、味は甘味がありまいちだ。ラガーのアルコール8%が一番飲みやすかった。食事はほとんどがバイキングであり、時間もあまりかけない習慣の様だ。時間をかけて食事を楽しむ文化はブータンには無い様だ。



23日、パロからティンプーに向かう。

10年ほど前に養老先生が来たときは1車線の道路で谷底に落ちそうで怖かったと言っていたが、今では2車線にこそなっていたけれど、ガードレールが少なくやはり落ちそうで怖い。

道路工事はインドの下層階級の人たちが集団で入り込んで行っている。道路端にブルーシートなどで小屋掛けし、家族連れで生活しながら工事をしている。水路工事や道路の築地も機械はあまりなく、ほとんどが男女のインド人が手作業で行っている。



ブータンではかなりの家が唐辛子を栽培していて、あちこちの家で屋根一面に干していた。かなりの高収入になるらしい。

取材用に何枚か屋根一面の唐辛子の写真が欲しいという事で、途中の農家で老婆が屋根で干しているところが

ありガイドに話してもらおう。

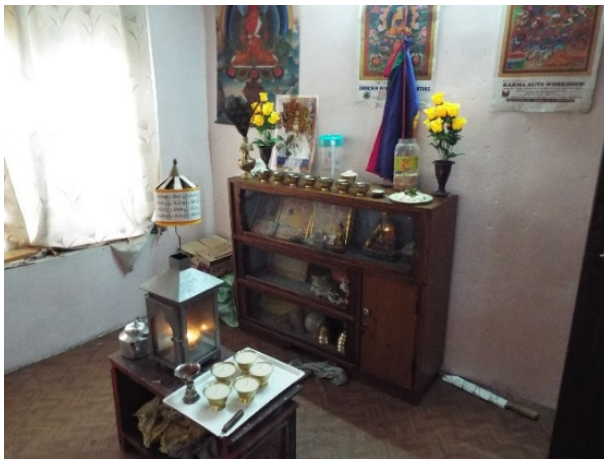
屋根から降りた老婆は62歳との事でよく見ると老婆では少しかわいそうだ。

誕生日はブータンでは1月1日で登録する人が多くこの女性もそうだ。

取材で何点か聞き取りをし、建物の中を見せてもらう事になった。全体にブータンの家は装飾や縁起の良い絵が描いてあるものが多い。この家はあまり広くはないがブータンの標準的な家らしい。横に畑もありまずまずの家だ。

ただ、この家はブータンの田舎によく見られる一階が物置で屋根裏のある伝統的な農家とは違う作りになっていた。

間取りは台所と仏間があり、あと2部屋程ある。ブータンではほとんどの家が仏間を持っている。



ブータンでは環境的意味合い（資源の節約？）から、屋根は法律でトタン屋根にすることになっていて、ホテルや団地などの近代的な高い建物もトタン屋根で葺いてあり、何か違和感がある。トタンの上に板を載せ、石で重石としている家もある。女性はすぐ近くの村（少し前にNHKの取材が入った）から嫁ぎ、離婚

したが今は息子と二人で暮らし、老後は何の心配もなく幸せだと語った。ガイドが言うのとは違い、こういう人たちが幸せだというのはやはり幸福の国か。

この間畑で虫探しをしていたTさんが何か大声を出していた。「ゾウムシ」を見つけて入れるものが欲しいと叫んでいたのだ。

その後、唐辛子を少し分けてもらい皆で持ち帰ることにした。

また途中にはところどころに物売りが出ていた。

見晴らしの良い高台にある所で車を止めた。女性が地面に火をおこしトウモロコシを焼いていて、そばにはマツタケが並べてあった。

谷を挟んだ対岸の山の麓に小さな集落があり、そこが彼女の家だという。マツタケはその上の山にあるというが、松はあちこちで見えるが日本の松とは違い棘状の葉の柔らかく細長い木だ。

マツタケは昨日ガイドに頼んであり、手に入れば今日の昼に出すとの事だった

が、チーズで炒めレモンをかけたマツタケが昼食には並べられた。なんという調理をするのだろうか、やはりブータンだ。

マツタケは日本人向けでかなりの需要があり商売になっている。中国人は冬虫夏草の需要が多く中国人が勝手に取っていたが、最近は自分たちで採取し、こちらでもかなりの商売として成り立っているようだ。

冬虫夏草はパロ空港にも大きな看板を出した店舗があり、一部では農家が専門で事業としているとの事だ。

パロからティンプーに向かう途中は、以前見たイタリアからスイスに向かうアルプスの風景にも似ていて美しい。

山はある程度急傾斜で樹木は少なく、緑の草地が覆いところどころに岩肌が見える。

川は水量豊富で谷底を削って流れている。どこの川もそうだが氷河が流れ落ちるのかすこし白濁しているように見える。パロとティンプーから流れる川が途中でT字型に合流し、インドへと続きインド洋に流れ込んでいる。この川の途



中に大規模な水力発電所があり、その利用料はブータンの国家予算の収入の部分の多くを占めている。

ブータンの電力以外の大きな収入は国際援助で、国家収入のトップだ。

日本の援助は金額だけでなく技術支援もあり様々な面で評判が良い。

特に J I C A の評判は良く、故人ではあるが農業指導の西岡氏は西岡ダショー（名誉称号）と呼ばれ、今でも多くのブータン人に尊敬されている。

ティンプーに近づくと数年前までは家も少なく、何もないような郊外が今は団地の建設ラッシュである。地方から町に出てきた人たちの住宅だが、あまり就職口は無い様だ。

ブータンでは困っている人には誰かしら支援の手を差し伸べ、最低限食うには困らないので意外に気楽に出てくるようだ。

教育費と医療費は無料であり、国民性にも呑気なところがあるようだ。

道路沿いには、インドのタタや韓国のヒュンダイ等の自動車ディーラーの看板も見える。

中心地に大きなショッピングモールもできたが、程なく閉鎖し今は空き店舗の一部が事業用事務所になっている。

首都ティンブーは人口約10万の街で、ホテルや店舗も多い。信号はボタンに一つもなく、中心部の一カ所にあったそうだが、今は交差点中央の仕切られた立ち台に警官が入り手で交通整理をしていた。他の交差点はロータリー式の変形であるようだ。道路中央に仏塔がある所もあり、マニ車の回し方と同じで車は右手に見ながら走ることになっている。

車は全国約4万台でそのうち約2万台がティンブーを走っていると、ガイドが言っていたような気がする。地方ではインフラが整わず車が走る道は少ないのではないだろうか。

以前、日産のゴーンさんが来て電気自動車を数台送られたが、バッテリーの交換ができないとの理由で不評だとの事だ。

人気車種はトヨタのランドクルーザー（ピックアップタイプ）の様だが、なかなか庶民の手には入らない。ガイドも現生でダメなら来世では手にしたいと言っていた。

ティンブー最初の見学は、ブータンの宗教と政治の中心であるタシチョ・ゾンだ。

周りを白壁で囲まれた大きな建物でかなりの存在感があり、中に入るには空港



並みのボディーチェックとX線の荷物検査が必要だ。

あり、祭りの練習と言う事で中央に円を作り多くの男女が踊っていた。周りは飲

並みのボディーチェックとX線の荷物検査が必要だ。

犯罪等少ないブータンでは珍しい。

階段を上がると広い石畳みの広場が



食をしながらの観客が広場に座って楽しんでいた。

正面の建物は僧正が並んで見ている。その数階上の階では椅子に座って大僧正が見ていた。楽屋からの出入りは日本の能と同じく、色付きの幕を持ち上げて行い、出入りの時は静かに行う。真っ赤な仮面をかぶった道化役が何人か周りに居て、観客に話しかけたり写真を撮ったりして道化っていた。



次の視察はメモリアルチョルテンと呼ばれ3代国王が建立したものだ。先のゾンと比べると大きな敷地ではない。

中に入るといわゆる炊き出しがあり、近隣の老人が食事を取り、マニ車を回していた。ここではこうした炊き出しが誰でも食べられるので、食の

心配は少ない。人間も犬も最低の食事はこうしたものも含め、困っている人には誰かが提供してくれるらしい。



中央の仏塔の回りを大勢の人が時計回りに呪文を唱えながら回っている。その外では五体投地で拝礼をしている人たちもいて賑やかだ。最低3回は回ると言う事でガイドと歩いて回った。

ホテルに向かう途中で国技の「アーチェリー（日本の和弓に近い）」を楽しんでいるとこ

ろを見学する。

120mくらい離れたところに双方5～6人が居て交互に30センチ程度の的をめがけて射る。

材質は竹で日本より小ぶりだがよく飛ぶし、あまり溜がないがまあまあ当たる。的に当たるとみんなで歌い祝う。

U市の研修で知り合ったNさん（ブータン人）の従兄弟が、夕方ホテルに来る

ことになっているのでガイドに帰ることを促し帰路に就く。

ホテルで待つこと暫し、ガイドの案内でタシ君が部屋に現れた。長岡の大学に留学経験を持ち、今は国家公務員で工業規格に関する部署のリーダーと言う事だ。少しくたびれたスポーツウエアを羽織り、顔は丸顔で日本人に近い。雰囲気だけだと近所のお兄ちゃんという感じで、親しみのある好青年だ。

従兄弟のNさんはどちらかと言うとインド系の風貌なのでギャップがあった。



差し入れに果物の盛籠を持ってきてくれたので、養老先生の部屋にも挨拶に行き記念撮影をした。

Sさんも含め3人で食事に出ることにした。タシ君の友人の店でブータン唯一の韓国料理店でご馳走になった。

ブータン料理が続いたので韓国料理はありがたかった。各テーブルに電気で熱する鉄板があり日本の焼き肉屋に近いが、料理は少し違うが旨かった。

タシ君のおごりだが普通の人とはなかなか入れない高級店らしい。タシ君は日本語がある

程度話せるのでいろいろな話を聞くことが出来た。

来る前に従兄弟のNさんに学校を見たいとお願いしておいたので準備してくれたとの事である。取材としては児童と養老先生は絵になるのでSさんが遠慮し、養老先生、Oさんと私の3人で翌日訪問することにした。



24日、タシ君が合流し、先ず中央郵便局に行きました。各人が養老先生とツーショット撮影を行い、それを記念切手にした。その切手はブータン以外では使えないので、SさんやTさんはそれを貼ってブータンから手紙を出した。

そこからタシ君の運転する車に3人

が乗り込み学校見学に向かった。当初は車で30分ほどの田舎の学校を予定していたが、地方選挙で休校との事なので、ティンブー市内の学校にお願いしたとの事だった。

この学校も授業は休みで、ボランティア作業と祭りの練習をしていた。ゴ（ブ



ータンの男性民族衣装で正装)を纏ったタシ君の案内で、先ず校長に挨拶し概要を聞く。ボランティア作業はリサイクル利用でペットボトルを植木鉢などに加工していた。

校長は慌ただしく説明しどこかに出かけて行った。

どこでも校長は似たようなもの

だと養老先生が言ったが納得だ。

校舎裏側の天井の低い、狭い部屋の中に子供たちが居た。壁一面にいろいろなものが貼ってある中に5, 6年生ぐらいの子供たちが30人ほど入っている。

担任が養老先生を紹介し、子供たちとの意見交換が始まった。もちろん英語だ。

ブータンでは国語であるゾンカ語を話すのはティンブーなどの街中で、田舎で



は様々な言語が使われ、ゾンカ語を話すのは2〜3割と言われている。そのため統一言語として英語が採用されている。国際化を見込んでの英語教育では無い様だ。しかし英語が話せるのは強い。もちろん養老先生は英語で子供たちとやり取りしている。

タシ君にホローしても

らいながら聞いていると科学者になるにはとか、恐竜がどうか話していた。

その内 0 さんと私とも話すグループが出来、私の所では柔道の好きな子供の質問や相撲の話をした。歌を歌って欲しいとの要望もあり、先に子供たちに歌わせ、サクラサクラを教えてやった。



帰り道で養老先生は子供たちの相手は疲れると言っていたが、まさにその通りであった。疲れるけれど純朴な子供たちと会えたのはうれしかった。また子供たちは相手がどの程度真剣に向き合うか見ているとも語っていた。

学校訪問終了後、他のグループと合流の為ティンブー市内を見下ろせる高台にある大仏に向かった。大仏坐像は金色に輝き高さ約50mで世界最大と言われ、シンガポールと香港の億万長者の寄進によるものだ。

大仏周辺及び大仏内部はまだ工事中であるが、さすがに大きいし展望もよい。

ここで私とSさんはタシ君と行動を共にすることにした。最初に小さな寺のチャンガンカ・ラカンに行ったが寺院関係が多く、帰ってからの印象が薄い。タシ君の友人のタイ料理の店で麺類を食べたのち、高級住宅街を通り抜け珍獣ターキンを見に行く。



Sさんは疲れが出ているのでホテルで休むことにした。ホテルでSさんと別れたのち、タシ君の車でタンゴチェリと呼ばれる地区までドライブした。

市内を流れる川の上流に向かって30分ほど走ると、僧侶の大学が静かな林の

中にあり、平日なら見学できるとの事だ。



タンゴチェリは山の中腹にいくつかの僧房がある場所で、屋根橋があったが雨が降ったりやんだりで、少し離れた僧房を山の下から見て引き上げることにした。

ホテルに戻ったが時間があるので、タシ君お薦めのコーヒーショップに入った。ホテルのコーヒーもインスタントのようなものが多かった

ので、ここのコーヒーの味はまずまずで満足。本格的なコーヒーの店は少ないとの事だ。店には欧米人風の客が3組ほどいた。おそらくネットで欧米旅行者に紹介されていると思われる。

タシ君の話では、旅行者のNO・1は日本人、以下アメリカ人、ドイツ人、台湾人、インド人だというのが実際の体験から言うと、どうも少し違う。養老先生の分析では国のデータと実際は少し異なるという事らしい。

夕飯は旅行社主催で格式あるブータン料理の店に入った、タシ君も一緒であった。明日は養老先生とは、お別れで明日から行動を共にするIさんも加わった。

Iさんは映像作家と言う事で、先の養老先生出演の番組「明治神宮」の制作者の一人である。

夕食後はタシ君と二人で飲みに出かけた。来る前に友人のSさんからブータンでは最近ではディスコとかあるよと言われていたが最初はステージのショーを見ながら飲めるところに入った。

店に入る前にタシ君がATMで金を引き出そうとしたので、今後はこちらで支払うと言って止めた。店の中は薄暗くソファー席、後ろはカウンター席で、



客は半分ぐらいの入りの方である。

メンバーは交代で、何曲か歌いながら踊ったがブータンの若い人向けか、多少民族音楽的な雰囲気のある良い音楽だ。

ブータン初(?)のニューハーフの歌が出た頃にタシ君の友人の男女が加わった。ドイツ人と結婚した

女性とその仲間でバッグの販売をしているおばさんと若い女性、そして男友達だ。

ブータンバッグの話が出て、翌日の夕方、ホテルに持って伺うという話になった。その後、皆でディスコに行くことになった。

日本でも行った事はないが、行くと店の周りからして賑やかであった。店内は踊る部屋と座って飲める部屋があり、店外よりさらに賑わっていた。

適度に付き合い早めに帰ることにした。

周りにはカラオケの店も何件かあるようだった。

やはりブータンと雖も時代の流れの中で都市と地方、若者と年配者の考え方や行動にギャップが感じられた。伝統を守るため民族衣装のゴ・キラを義務付けても町は自由な服装であり、若い人はティンプーの近郊の団地に見られるように都会に集まってくる。ガイドの話だけでなく実際に街を歩くと多くの矛盾が感じられる。

タシ君は国家公務員であるがかなりビジネスに関心があり、国策で企業誘致というよりは自分で起業も考えているようだ。

彼の父は資産家でインドに近い平地に住んでいるが、ビジネスチャンスがあると何度か誘うように言っていた。

タシ君の案内でホテルに戻った。昨晚もそうだがタシ君は酔わない程度にアルコールを飲み、帰りは運転して帰った。少し前の日本の田舎のようだった。

タシ君には本当にお世話になりいろいろと案内していただき感謝しきれない。ブータン人の「おもてなし」は変ないやらしさがなく好感が持てた。

25日、雨模様であるが今日はティンプーから片道約3時間の山越えで、古都プナカに向かう。養老先生は小学生の時ブータンには首都が二つあると聞き不思議に思ったそうだ（よくそんなことまで覚えているものだ）。

プナカはかつて冬の間の首都であった。

最大の期待は晴れていれば峠でブータンヒマラヤの雄姿が見ることが出来ると言う事だ。

ブータンでは雨期の終わりにあたる事、一日中降る雨は少ないという状況下で、帰りもあるし、一縷の望みを抱き出発。

舗装道路を少し走っていくと簡単な検問所があり、県を越える時、旅行者はチ

ェックされる。その辺りから先はぬかるみの細い道や道路の側壁（ほとんど切り崩しただけ）側や路側が崩れている道路だ。

かなり危険な状態の道でスリルがある。

養老先生の解説では森林限界が4500mぐらいだといい、長い歴史の中で土壌に攪乱がなく安定しているからではないかとの事だ。

また、沢筋ごとに様子の違うところもあり、この辺の森は日本に似ていて、少し走ると南方の植物に似たものもある。

全体的には照葉樹林帯のようだ。沢筋ごとに植物の種類が違うのは興味深い。

3150mの峠にあるドチュ・ラ近くのドライブインで休憩。残念ながら雨でヒマラヤは見られない。プナカまでは同様に悪路が多く、途中のところどころ



に露店で野菜等の販売がある。

峠から1時間ほど下ると標高1350mのプナカの集落が見えてきた。

亜熱帯気候でバナナも生い茂り、植えたのかもしれないがサボテンもある。

チミ・ラカン（ブータンの家に男性器を描

く風習はこの創建者に由来する。子宝の寺）周辺の棚田は、秋の実りの時期で黄金色が美しく、遠目には日本の田舎の秋景色そのものだ。



二期作が出来る気候だという。プナカ・ゾーンは2本の川が交わる場所にあり、三方を天然の堀によって囲まれている。

雨の中、駐車場からは



ブータンに多い屋根付き橋を渡って入る。橋を渡ると急な石段があり、上がった処の門を入ると、仏塔とインドボダイジュの繁る石畳の広場になっている。

ゾンの中を拝観、巨大な講堂の中には、中央に仏陀、左にパドマサンババ（グル・リンポチェ）、右にシュプドゥン

と言われる像があり、いずれも大きく鎮座している。前では二人の僧侶がバターランプや着色した餅で飾り物を作っている。

ガイドの頼みで写真はOKになった。五体投地で拝礼後に2階へと上がる。

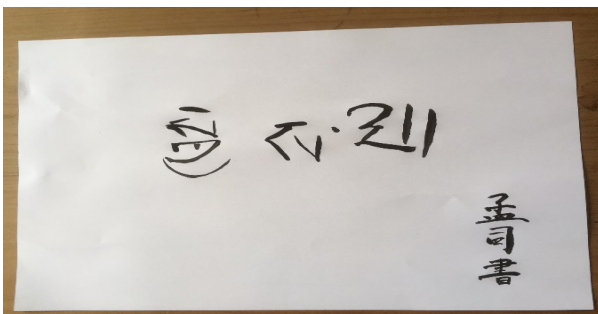
2階の廊下を歩いていると年配の僧が居た。ガイドが話を聞ける様に計らってくれた。

0君が取材を始める。間が空いたのでここの維持管理はどうしているかと聞くと、寄付やボランティアだと言い、国からは支援はないらしい。養老先生が「みんなで手伝ってやるのだ」と教えてくれた。

最後に記念写真を撮った時、養老先生が「いい顔しているな」と言い皆納得。

帰途につき、途中棚田とチミ・ラカンを見下ろす高台で写真休憩。

チミ・ラカンを見学するかとガイドが言うが、皆はもういいと言い昼食の場所に向かう。



レストランも高台で眺望は良い。ここはホテルになっていて養老先生とIさんとはここで別れることになり、養老先生たちはここからさらに一週間ほど虫取りに向かう。

別れ際にSさんがゾンカ語で輪廻

転生を養老先生に書いてもらうことになった。

この字はゲンボチーフに聞いたのだが、後でガイドに聞くと、これはジャガイモと取れると言い、別の言葉を教えてくれたのでいずれ訂正することになった。

どちらが正しいのかは判らない。

帰路もブータンヒマラヤは雨で見えず、明朝を目論むがガイドに否定され諦めた。

帰り道ふと目を向けると側面の山がごみの集積所になっていて、大量のごみがあった。

多くはペットボトル等の様だがゴミの山の中に人が何人か見えた。片付けているのか何か使えそうなものを見つけているのか、またブータン人かインド人作業者かわからない。

意外だが全体にブータンはあちこちにゴミが多く、首都ティンプーでも街のあちこちにゴミが散乱している。水路などは結構ゴミで埋まっている。

あまり衛生面も含め気にしていないのだろうか。観光を主力産業にしようとしている割にはひどく、特区でも決め少しずつでも片付けないと観光立国にはなれないのでは、というのが衆目の一致した意見だった。

ティンプー市内到着後、最後の晩だしブータン料理も飽きて来たので韓国料理を食べようと言う事になり、計画するが日曜で休みだった。

ガイドお薦めのブータン料理の店に行くが、混雑していて全員は入れないので二組分かれ別行動をする事にした。

我々のグループは昨夜見たイタリアンの店を目指すが、記憶が曖昧でなかなか見つからない。やっと着くと休みだった。

外国料理の店は少なくあきらめて帰ろうとすると、オープンかクローズかわからないがスパゲッティが食べられそうな店があったので、そこに入った。客は誰も居ない（我々が食べ終わるまで誰も来なかった）。

スパゲッティと肉料理を頼んだがまあまあの味であった。

ガイドが聞き出したところブータン王族の関係の店だと言う事だった。

帰り際にガイドに明日土産の織物工芸館に少しでも寄ってくれと頼む。ついでにガイドの家も見たいと言うとOKが出た。

26日最終日、パロ空港13時35分発。

朝、ホテルからガイドの家に行く。

まだ新しい賃貸マンションだ。給料の8割ぐらいの家賃だそう（後でわかったが今回の旅のチップがガイドブックに書いてあり計算すると給料と同じくら

いになる)。

4LDK(?)か。他の家と同様に一部屋は仏間にしてあり、先日の唐辛子の家の仏壇とは比較にならないほど豪華な仏壇(数年分の貯金をはたいて、名人の建具師に頼んだという)が部屋の一面を埋めている。宗派はチベット仏教のカギュ派でダライラマの写真がある。

家には障害で言葉の話せない高校生の男の子がいたが、母親と一緒にお茶を飲んだ。彼は学校でも優秀で障害を悩んではいず、幸せだと言っていた。近年ブータン流の手話が開発されたらしい。

空港着、各自ブータンマツタケを受け取り、飛行機に乗り込む。

コルカタ経由バンコクへ。バンコクで4時間ほど待ち時間があり、空港内で過ごし皆と最後の食事をした。羽田着後はそれぞれ帰途に就くためゲートを出たところで解散した。

ブータンに墓はない。ツェツェと呼ばれる小さな素焼きの仏塔に火葬の灰を練りこんだものを思い思いの場所、道路沿いの岩の隙間や山の岩の上に納める。道路わきに小屋のような置き場所もあったりする。



輪廻を信じる世界で墓を持たないのは、人の死は身近であり特別のことではないという思いだろうが、ツェツェを置き慰霊の旗ダルシンを置くことは、死がやはり身近な人にとって悲しい別離であることは変わらない。

最高の埋葬としては鳥葬、火葬が一般的な様だが、ガイド

の田舎では魚葬と言って、村の専門の人間が遺体を切り刻み小麦粉などと混ぜて魚に食わせるという。死んでも遺体は無駄にせず魚のためにするとか。「俺なんか3,000遺体を解剖した」と養老先生。

チベット仏教は絶対者を認めず、現象世界を法則によって解明し、努力の領域を肉体でなく精神に求め、出家により集団生活をし、施しで暮らすという初期

仏教の形をとどめているようにも思える。

こうした宗教文化を持つブータンが他のアジアの後発国の様に資本主義社会に加われるのか、また加わろうとしているのだろうか。

大僧正を中心とした僧侶と国王と各県から選ばれた議員は政策にどう絡んでいるのだろうか。国王や大僧正の意見がかなり反映され、伝統文化を大事にする姿勢は強いが、片方で英語教育を受け、制限なく流入する情報に若者は変化しつつあるのではないか。

グローバル化の進み過ぎた現在、資本主義そのものが終焉に向かっているとも思える状況の中、ブータンは我々に次の時代のヒントを与えているのかもしれない。

人口規模が小さく、特異な自然環境と仏教を大事にするブータンによる理想の近代国家への挑戦は続くであろう。世界が新たな価値観や目標が見いだせない中、混迷は深層では進みつつあるのではないだろうか。

今回の旅は心安らぐ「懐かしい未来」への旅であり、自らの生活の在り様に思いをはせる旅だった。

龍の王国ブータンの未来への挑戦は、ブータンの人々に単に際限のない欲望の灯をともしのか、諸行無常の世界を「今、ここだけ」という刹那の生き方から永遠の真理に誘うのか考えさせられる。

思い出深いブータンの旅だった。